

定型発達が正解とされる支援では何も変わらない  
生まれ持った特性をベースに、  
互いがどう折り合いをつけて共生していけるか



## INTERVIEW

一般財団法人 発達支援研究所

所長 山本 登志哉さん

株式会社クラ・ゼミが全国展開する「こどもサポート教室」や、一般財団法人福祉教育支援協会（センター長 引地達也 シャローム大学学校学長）をはじめ、行政や教育・福祉機関など多様な発達支援機関と連携し、独自に療育支援システムを研究・開発する発達支援研究所。学術的な理論もさることながら、「現場感覚」に即したアプローチを心掛け、各支援現場からの事例を収集し、共有するプラットフォームとしての役割も担う。単に発達障がい者への対応方法を探るのではなく、発達障がい者と定型発達者が共に自分らしさを見失わずに、どう折り合いを付けられるか。定型発達を基準としてきたこれまでの発達支援の価値観を覆し、本質的な共生社会を目指す。

## アスペルガーの人に「共感性はない」のか

発達障がいの中でも特にアスペルガー症候群の方などは、対人関係でしんどい状況に置かれ、時に「共感性がない」だとか、ひどい時には「人の心を持っていない」とまで言われてしまいます。しかし、長年、私が当事者と話し合ってきた経験からすると、アスペルガーの人たちがどれほど共感を求めている、共感されないことにどれほど絶望を抱いているかということがわかります。

最近では脳科学が流行りですが、例えば共感性のある文章を読ませて脳の働きを見たりすると、定型発達の人には共感に関する脳の部位の働きが見られて、アスペルガーの人には見えない。だから「やっぱりアスペルガーの人は脳が違うのだ」と思われます。私は、そんなことははずはないと思っていたところ、京都大学の白眉センターにおられた米田英嗣さん（現・青山学院大学 准教授）が面白いデータを出し始めました。アスペルガーの特性を現す人について読んでもらうと、アスペルガーの人のその部分が働き出したのです。つまり、共感能力がないわけではなく、何に共感するかというポイントが違うのです。

それは実際に当事者と話す中でもわかってくることです。例えばアスペルガーの家族が病気になった時に、「大丈夫？」と声をかけたりしますね。すると、「それで、なんて言って欲しいの？」と聞き返されたりすることもあるんです。普通そんなこと言われたら、気遣いしたことを拒否されたようでショックを受けます。

こういったことが夫婦間で起こるともっとしんどい状況に陥る。「カサンドラ症候群」と名前もついています。主に夫がアスペルガーであるケースが多く、パートナーの

ほうが精神的に耐えられなくなってしまうのです。また、これが親子関係になれば、親がアスペルガーの場合、子どもは「自分は親から愛されていないんじゃないか」と思い不安に陥ることもあります。

しかし、じっくり話しこんでいくと、こうした言動の裏には、アスペルガーの人なりの相手に対する気遣いがあることが見えてくるのです。これは私が当事者の人たちと関わり、「こういうことですか」「そうです」などと共通の言葉を一生懸命つくっていく中で、数年かけてやっとわかってきたことです。

基本的な感じ方からお互いにものごくずれがあるので、ですから、支援を考えていくには、まずは「お互いにどれだけ違うのか」を理解することから始まると思います。定型の感覚で考えている限りは、視点の切り替えはできません。感覚が違う者同士、わからない相手のことを一生懸命考えていても理解できませんから、そこで対話が大事になるのです。

相当コミュニケーションを積み重ねないと答えは見えてきませんし、定型の人たちは自分の常識を見直していく作業、自分自身を掘り下げていくプロセスも必要となります。理解するために、定型側が身を削る大変さもあるということです。しかし、同時に考えて欲しいのは、発達障がいのある人は、それまでずっと身を削ることをやらされ続け、ボロボロに傷ついていることがとても多いということです。子どもの頃から、定型の感覚で「こうしなさい」と言われ、わからないことを要求され続け、理解できず、責められて苦しんできたわけですから、そのうえ社会的には

少数派ですから、自分たちが理解されない状況が世の中で当たり前になっている。そうした中で育ってきたので、ちょっとしたずれが生じるだけでも、定型側はそのつもりがまったくない場合でも、自分が責められたと強く感じてしまい、その結果コミュニケーションが難しくなることも少なくありません。



専門家が正しいことを与えるのではなく、現場で一緒に考えるスタンス。  
写真は研究所が提携する就労移行支援事業所「アクセスジョブ」



発達支援交流サイト「はっけんラボ」のトップ画面

## それぞれ違った発達プロセスがあるのではない文化、生き方の違いという観点が必要

発達心理学では、人が何歳になったらどういうことができるか、その変化のしくみは何かを研究します。そして、これまで研究されてきた発達とは基本的に定型発達をモデルにしています。しかし、発達障がいの子はちょっと違うルートで発達の仕方をしているのではないかと最近問われてきています。

すると、今まで「発達の遅れ」と言われてきたものは定型的な観点から見た「遅れ」であるわけですから、その人なりの発達の仕方があることがわかれば、今までの発達心理学では理解が追い付かなくなります。

僕が最近、特に気になっている例で言うと、自閉の子の言語発達の仕方が独特だということです。自閉の子は自閉の子なりに言葉を発達させており、発達のルート、コミュニケーションの作り方が定型と違う点がある。その違いを整理していくことが今後の課題でもあります。

この研究所の客員研究員をしてくださっている榎原洋一さん（お茶の水女子大学 名誉教授）は、「発達障がいへの支援は治療ではない」と仰っています。治療とは健康な状態に近づけていくという考え方ですね。ほかに「特性」という言葉がありますが、発達障がいの方はもともと持って生まれたものが違うわけで、定型の在り方が正しいとされる社会である以上、自分の特性に合わないことを求めら

れ続けることになるのです。

では、この問題は何かという、「文化の違い」「生き方の違い」だと私は思います。発達障がいの人でも定型発達者も、自分たちが持って生まれたものをベースにしながら、自分の条件の中で生き方を探していく。それが「文化」です。ところが、その生き方を探る中での前提（つまり特性）に違いがある。だから違う「文化」が生まれる。僕の研究テーマの一つが「異文化間の理解」なのですが、これは異文化を持った者同士がどうやって一緒に生きていけるかという問題にもつながります。

これまでの支援は、定型側の「私たちが正しいのだから、あなたたちが近づきなさい」というスタンスが中心でした。しかし、個人の症状の問題ではなく、特性の違いによる生き方や文化の違いという観点から問題を考えていけば、違う感性、価値観を持った者同士がどうやって折り合いを付けられるかという流れになるはず。その道を探ることが本当の意味での支援の在り方となり、そこにこそ本当の共生があると思います。

## 交流サイト「はつけんラボ」 「現場感覚」を収集・共有しヒントに

発達支援研究所は2016年4月に設立されました。クラ・ゼミさんが運営する「こどもサポート教室」や「就労移行支援アクセスジョブ」をはじめ、発達支援に取り組む全国の機関と連携して研究や開発を行っています。

彼らが大事にしている視点は、専門家が正しい答えを与えるのではなく、現場の人たちと一緒に学んで、問題を考えていくことです。所属する一般研究員は「現場の人」から選ばれ、一緒に問題を考えていきます。一方、客員研究員というのは主に研究者の方たちですが、この方たちも同様に現場で学んでもらう姿勢を持った方たちが多くいます。

もともとは「こどもサポート教室」が全国展開する中で、クラ・ゼミさんから教室での研修を依頼されて設立の話が進みました。最初は「これをやれば支援はばっちり」みたいなもの依頼されたのですが、そんな方法があるわけありませんので、まずはみんなから、どんなことで困っているかを出してもらいました。全国から200以上の事例が集まり、それを毎回10事例ずつくらい、みんなに質問として出しました。すると、「私だったらこう対応する」といったアイデアが5000以上集まったのです。

そこには何かすごい理論があるわけではなく、現場の感覚から「こうだろう」という工夫がいろんなパターンで出されました。自分では気づかない視点も出てきて非常に発見がある。これをヤフー知恵袋のような形で共有できればと考えました。

一方、現場の人たちは、自分たちの支援について多くの不安を抱えていました。教室が全国に散らばっていますので交流も難しい。そのため、ネット上で情報交換できるシステムも作りました。

その経験をベースに、今回Webで行う発達支援交流サイト「はつけんラボ」を始めました。支援者、研究者、教育関係者など様々な立場の人がサイト上に情報を提供し合って、様々なコンテンツの中で発達障がい者も定型発達者も共生できるしくみを模索しています。

このサイトを作る際にかなり試行錯誤がありました。制作会社の方が最初に提示したアイデアが、定型の女の子が明るくお勉強しているようなイメージだったからです。それは困難を抱えながら、それを乗り越える人の明るさとは違って、ただ明るいのでした。そこで私は、担当者の方に自閉症のお子さんを育てられたお母さんからのメッセージ動画（※注釈）を見てもらいました。

ここで流れるお母さんのメッセージは、「あるがままのこの子と一緒に生きていきましょう」というものです。健全の人たちの頭の中でつくられた世界では、障がいのある子は「足りない」、「できない」というかたちで位置付けられてしまう。そうではなく、その子が自然に持っているものからどう出発できるのかという視点が必要です。デザイナーの方は、「美しいもので共感できるようなものを作りたい」と話されましたが、そうではありません。安易な共感なんて成り立たないところが出発点。共感を押し付けるようなものだったらどうしようもないのだと。いろいろと言わせてもらって、出来上がったのがサイトのトップデザインです。

イメージは街や空間をコンセプトとしました。見てもらうとわかりますが、いろいろな情報提供や

交流の場が自然に広がるようなイメージです。全国各地で孤立して悩んでいる方たちがここに来て、わからない者同士が語り合い、「え？ どういうことなの？」と考えるきっかけがここにはあります。ここは正解を提供する場所でも、何かを教える場所でもありません。みんなと一緒に考え、そこから新しいものを生み出していきたいと思いますという場所です。

※自閉症のお子さんを育てられたお母さんからのメッセージ動画『僕は僕なんだから…』（はつけんラボ → はつけん劇場 → 保護者の思い）



自閉症のお子さんを育てられたお母さんからのメッセージ動画『僕は僕なんだから…』。サイト内のコンテンツ「はつけん劇場」やYouTubeなどでも閲覧できる

# 「違い」を楽しめる人から広げていく

お互いを理解するためには、まず違いを確認し合うことから始めていきます。「えー？」という驚きや発見から始まり、「でも、でも」と議論していくうちに、「そこまで違うなら仕方がないよね」という気持ちが出てきます。ようやく、そこが出発点です。

言うは易く行うは難しですが、まずはそうした違いを楽しめる人から、この街を広げてもらえればと思います。違うものと接することで自分についての新しい発見もできます。自分が更新されていくといった感覚にまでいければやめられなくなります。

お互いに成長し合いましょう、「私が正解です。あなたは私を見習いなさい」という関係はもうやめましょうよ、と。何か面白いことがないかなと、お互いに発見し合いましょうというものになればと思います。

はつけんラボの本格的なオープンは2019年8月でしたから、まだまだこれからです。利用は会員制で、種類によって利用できるサービスも変わってきます。とりあえず無料で登録できるメルマガ会員を増やして、できるだけ関心を持っていただくことが出発点かなと思っています。

また、今後、研究所としては就労後の支援についての研

究も取り組みます（「障がいと仕事研究会」）。障がい者雇用における就労後の定着率の低さが課題として挙げられています。それはお互いに理解が難しいからです。そうしたディスコミュニケーションを乗り越える道を、当事者も含めて考えていきたいのです。

そのなかで雇用する側もされる側も、葛藤に対処する工夫を探していけたらと思います。その上で少し余裕が生まれたら、企業への相談事業も行っていけたらと考えています。

## Office Data

### 一般財団法人 発達支援研究所

〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台 2-11-1

駿河台サンライズビル B1

E-mail : [info@hatsuken.or.jp](mailto:info@hatsuken.or.jp)

URL : <https://hatsuken.or.jp/>

## 発達支援交流サイト「はつけんラボ」

### ●会員制サービス

	メルマガ 会員	個人 ベーシック 会員 (個人 B)	個人 アドバンスド 会員 (個人 A)	団体会員
会員料金	無料	300 円/月	500 円/月	1 万円/月
新着記事お知らせ (メール受信)・無料コンテンツの閲覧	○	○	○	○
有料コンテンツの閲覧	×	△	○	○
コメント投稿	×	×	○	○
事業所・企業紹介、求人情報、イベント情報の掲載	×	×	△	○
「支援の工夫集」AI 検索	×	×	×	○

※1年での一括払い。表示金額は税別。※団体会員とは、事業所や企業の会員を指す。

※△は利用可能なサービスに制限がある場合



会員申込ページ ▶▶▶ <https://hatsuken.or.jp/member/registration/>